実践報告
長谷川由香/アカデミック・ジャパニーズ・ジャーナル 11(2019)10-18

プレゼンテーション評価におけるルーブリックの導入報告

長谷川由香

要旨

本稿は、留学生の日本語プレゼンテーションにおいてルーブリックによる評価を導入した実践の報告である。評価を学生自身が行い、さらに学生と教員とが到達目標に向かってともに努力するためのコミュニケーションツールとしてのルーブリックの有用性を探ることを目的としている。学生本人、クラスメイト、教員がそれぞれプレゼンテーションの評価を行った結果、ルーブリック評価シートは従来のシートに比べ、学生からより高い支持を得たことが確認された。さらに、評価基準が詳細に示されているため、学生および教員の評価作業も効率化された。一方、評価結果を見ると、三者の間には項目によりギャップがあったが、それらの分析にもルーブリックが有効であった。ルーブリックによる評価をより効果的・効率的に行うため、今後は教員と学生間での評価ギャップを認識し、達成すべきレベルを双方がすりあわせていく作業が必要である。

キーワード

プレゼンテーション、ルーブリック、自己評価、相互評価、ギャップ

1. はじめに

大学初年次の教育では、今後の大学における学びの基礎となる技術、つまりレポートの書き方やプレゼンテーションの方法といったスキルを身につけることが、日本人、留学生を問わず求められる。特に、人前で発表することは、ゼミ等における活動、および卒業後の社会生活においても避けては通れない。しかしながら、母国においてもプレゼンテーションの経験のない留学生も見られる中、まして外国語である日本語でそれを行うことは容易ではない。教師は望ましいプレゼンテーションの評価指標を示す必要がある。

本稿では、プレゼンテーションの評価を留学生自身が行うことを目的としてルーブリックを導入した授業の詳細を報告する。また、学生と教員双方が到達目標に向かってともに努力するためのコミュニケーションツールとしてのルーブリックの有用性を探りたい。

ルーブリックとは、「ある課題について、できるようになってもらいたい特定の事柄を配置するための道具」であり、「課題」「評価尺度」「評価観点」「評価基準」という 4 要素から成る（スティーブンス＆レビ 2014)。高橋他（2017）は教師の評価の公平性と学生への指標の明示化のためにルーブリックを作成した試みを紹介している。また、安高・品川（2017）は教師間で評価の観点や基準を共有し、評価の信頼性を高めるためのルーブリックを作成している。梶原・内山（2018）では、学生自身に評価基準を作成させるという試みを行っている。一方、日本人学生を対象とした例としては、三浦他（2017）がルーブリックを用いた自己評価、ピア評価、教員評価を比較している。

本稿では、留学生のプレゼンテーションに対する 2 種の評価表（簡素な評価表とルーブリック評価表）を使用した実態を報告するとともに、学生の自己評価、相互評価、教員評

価の実態を観察する。加えて、ルーブリックを導入したことで見えてきた、本人、クラスメイト、教員の三者による評価結果のギャップについても考察したい。

2. 授業の概要および分析対象

本実践は、2016 年度に都内の大学で筆者が担当した学部 1 年生の留学生対象の日本語科目において行われた。日本語レベルは N1～N2 でレベル別に 3 クラスに分かれている。国籍は、中国、韓国、台湾、ベトナムである。1 年生は週に 2 コマの日本語授業があり、1 コマはレポート作成のクラス、もう 1 コマは総合のクラス（読解および口頭表現）であるが、本授業は後者にあたる。授業の目的は国内外の諸問題（社会、経済、文化、政治、等）について理解を深めるとともに、4 技能のうち特に口頭運用能力を身につけることである。テキストは、春学期は『ニュース検定公式テキスト 2 級』、秋学期は『日本の論点 100』を使用した。授業時間は 90 分、期間は春学期 15 週、秋学期 15 週である。

春学期始めの 4 回程度でレジュメの書き方と、プレゼンテーションの進行の仕方および表現方法を練習した。その後の授業の流れは以下の通りである。

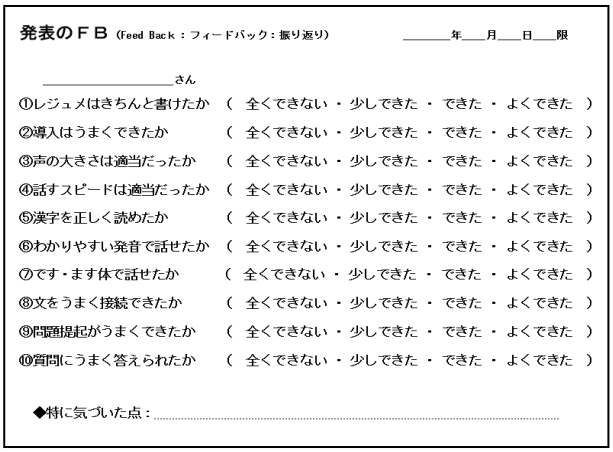
①レジュメを作成しプレゼンテーションを行う
・2 名 1 組で 1 トピックを担当する。記事の概要をレジュメとして所定の書式にまとめ、最後に問題提起を行う。（レジュメは 1 人 1 枚必ず書く）
・プレゼンテーションでのパワーポイント、写真、動画等の使用は特に規定しない。
②質疑応答後、クラスメイトは発表者に対する評価をする（シートへの記入）。教員が回収し、発表者に渡す
③発表者から提起された問題についてグループで討論を行った後、全体でシェアする
④発表者は自身の発表についてのレポートを書き、翌週提出する
・受け取った評価表に基づき、自己評価を行う。高評価および低評価を受けた項目について挙げ、省察する。
・担当したトピックについて内容を要約し、問題提起に対する自らの意見を述べる。
⑤教員も評価シートを記入し、気づいた点を書き添え、レポート提出後に本人に渡す

本報告では、学生の作成したレジュメ、評価シート、レポート、期末のアンケートについて検討する。分析対象のレポートは 45 名分、アンケートは 34 名分である。また、成績評価は春学期・秋学期ともに、平常点、レポート、プレゼンテーション、宿題（語彙確認および問題提起に対する意見述べ）により行った。プレゼンテーションの評価は、教員による評価点を用いた。

3. 評価シートの問題点

春学期に使用した評価シート（図 1）は、簡素なものであり、10 の評価項目について 4 つの評価尺度を持つ。本シートは評価の観点が簡潔な文で示してあり、4 つから選択すればよいため、評価に時間がかからないというメリットがある。一方、評価を行う学生側が評価内容をきちんと理解できているのかが不透明であること、コメントを書かない学生がいること、といった問題点も見られた。

図2は実際に学生に渡したフィードバックシートの例である。このように、1 人の学生に対し、細かなフィードバックを記入するため、手間と時間がかかり、教員に負担がかかってしまうという問題もあった。また、この作業の過程で、学生に共通する問題点がいくつも見られた。

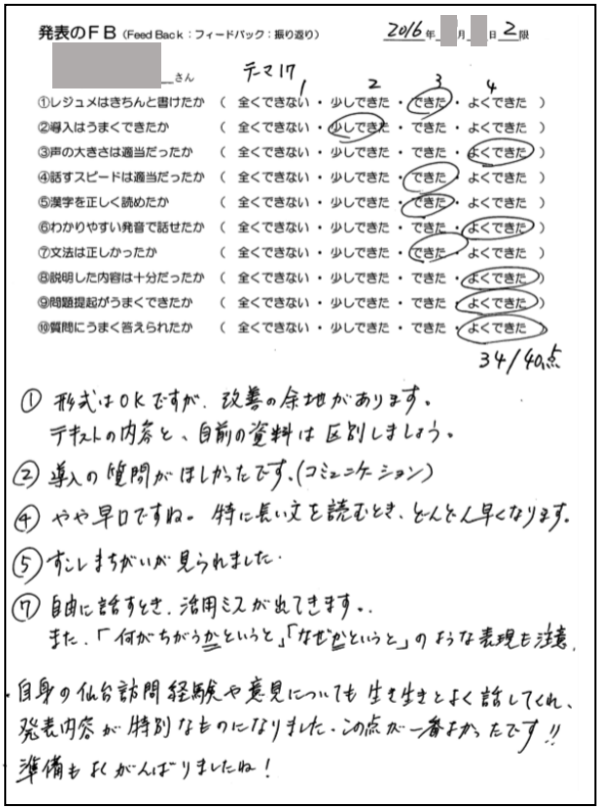

発表のＦＢ (Feed Back：フィードバック：振り返り)　＿＿年＿月＿日＿限

＿＿＿＿＿＿さん

①レジュメはきちんと書けたか　(全くできない・少しできた・できた・よくできた)
②導入はうまくできたか　(全くできない・少しできた・できた・よくできた)
③声の大きさは適当だったか　(全くできない・少しできた・できた・よくできた)
④話すスピードは適当だったか　(全くできない・少しできた・できた・よくできた)
⑤漢字を正しく読めたか　(全くできない・少しできた・できた・よくできた)
⑥わかりやすい発音で話せたか　(全くできない・少しできた・できた・よくできた)
⑦です・ます体で話せたか　(全くできない・少しできた・できた・よくできた)
⑧文をうまく接続できたか　(全くできない・少しできた・できた・よくできた)
⑨問題提起がうまくできたか　(全くできない・少しできた・できた・よくできた)
⑩質問にうまく答えられたか　(全くできない・少しできた・できた・よくできた)

◆特に気づいた点：……

図 1　評価シート（春学期）


発表のＦＢ (Feed Back：フィードバック：振り返り)　2016年＿月＿日 2限

＿＿＿＿さん　テマ17

①レジュメはきちんと書けたか　(全くできない・少しできた・できた・よくできた)
②導入はうまくできたか　(全くできない・少しできた・できた・よくできた)
③声の大きさは適当だったか　(全くできない・少しできた・できた・よくできた)
④話すスピードは適当だったか　(全くできない・少しできた・できた・よくできた)
⑤漢字を正しく読めたか　(全くできない・少しできた・できた・よくできた)
⑥わかりやすい発音で話せたか　(全くできない・少しできた・できた・よくできた)
⑦文法は正しかったか　(全くできない・少しできた・できた・よくできた)
⑧説明した内容は十分だったか　(全くできない・少しできた・できた・よくできた)
⑨問題提起がうまくできたか　(全くできない・少しできた・できた・よくできた)
⑩質問にうまく答えられたか　(全くできない・少しできた・できた・よくできた)

34/40点

① 形式はOKですが、改善の余地があります。
テキストの内容と、自前の資料は区別しましょう。
② 導入の質問がほしかったです。(コミュニケーション)
④ やや早口ですね。特に長い文を読むとき、どんどん早くなります。
⑤ すこしまちがいが見られました。
⑦ 自由に話すとき、活用ミスが出てきます。
また、「何がちがうかというと」「なぜかというと」のような表現も注意。

自身の仙台訪問経験や意見についても生き生きとよく話してくれ、発表内容が特別なものになりました。この点が一番よかったです!!
準備もよくがんばりましたね!

図 2　評価シートの教員記入例（春学期）

4. ルーブリックの作成

秋学期では上記の課題の解決を目指し、ルーブリックを作成した（図 3）。まず、学生へのフィードバック内容を踏まえ、評価シートの 10 項目を「レジュメ」「話し方」「文法」「内容」「質疑応答」「問題提起」の 6 つに統合し、新たに「意見」「態度」を追加して 8 項目とした。また、各項目について、頻出する問題点や意識してほしい点を考慮して3つの評価基準を作成し、図3のような配点を加え 40 点満点とした。

5. ルーブリックの使用方法

秋学期では始めに「よいプレゼンとは何か」についてクラス内で話し合い、評価に対する意識付けを行った。その上で、ルーブリックを示し、教員が求める基準について学生に予め理解を促すために全体で読み合わせて確認した。その後、ペアまたはグループに分かれてプレゼンテーションの練習を行い、ルーブリックによる自己評価で現在の自身の達成度および課題点を把握させた。

ルーブリックに記入する際は、あてはまるところにチェック（☑）することになっており、特に気になる点があれば、その文言部分に下線を引くか、もしくは囲むように指示した。合計点数を記入した後、最後にメッセージを記入する。教員からのフィードバックも

同様にチェックし、特によくできた点や、気をつけてほしい点には蛍光ペンでマークし、文言の足りない部分は表の中に書き足した。その上でさらに強調したいコメントがあれば、欄外か裏面に書き足した。

6. 使用した評価シート 2 種についてのアンケート結果

6.1 学生にとっての使いやすさ

クラスの日本語レベル（高い順に A、B、C）を問わずクラスメイトを評価する際は 82.4%、自己評価する際は 79.4%が秋学期（ルーブリック）のほうが使いやすいと答えた。使いやすい理由として、クラスメイトを評価する際は、下記のような声があがった（以下、学生のコメントはすべて原文ママ）。「見やすい」「評価しやすい」「前よりきちんと考えて評価するようになった」「評価内容が具体的に書かれている」「選択肢が少なくなって選択しやすい」。さらに、自己評価する際は、「見やすい」「自分の不足の部分がはっきり見える」「細かいので発表内容をふりかえるのに役立つ」「長所と短所を具体的に認識できるようになった」「FB をもらう時に特に感じた点を下線で指摘されたのでよかった」等の声があった。従来のシートでは単に 4 段階の印象評価であったものが、評価の観点が明言化されたことにより、このように「具体的に認識できた」「評価内容がわかりやすくなった」と感じたともとれるだろう。

発表のＦＢ　発表者：＿＿＿＿＿＿＿＿さん　＿＿＿年＿＿＿月＿＿＿日＿＿＿限

◆あてはまるところに☑をします。特に気になる点があれば、文の中に［　　］を書いてください。

	優（よくできた）：５点	可（合格）：３点	もう少し：１点
①レジュメ	□ 書式を守っており、見やすい。必要な情報も十分で、レジュメだけ見ても本文の内容がよく理解できる。	□ 書式や情報の量などで少し足りないところや見にくいところがあるが、内容はだいたいわかる。	□ 書式が守られていなかったり内容が不足していてレジュメを見ただけでは理解できない。全体的に読みにくい。
②話し方	□ 大きな声ではっきりゆっくり話しており、聞きやすい。効果的にスピードを変えたり、抑揚をつけている。	□ 声がやや小さかったり、スピードが不安定だったり、発音がやや不正確だったりする。しかし、だいたい理解できる。	□ 声が小さくて聞こえない。スピードが早すぎたり遅すぎたりする。発音が不正確で、何を話しているかほとんどわからない。
③文法	□ 常に話し言葉（です・ます）で話している。文法のミスはほぼなく、接続詞を上手に使っている。	□ 時々、書き言葉（だ・である）が混じる。文法のミスが少し見られるが理解できる。接続詞は少し使っている。	□ 書き言葉（だ・である）で話している。文法のミスが目立つ。接続詞はほとんど使っていない。
④内容	□ テキストに書かれていることを十分に紹介している。その上で、他の情報なども豊富に付け加えている。	□ テキストに書かれている、基本的な内容をだいたい紹介しているが、少し説明が不足している部分がある。	□ テキストの内容をあまり紹介していない。または、関係のない内容を紹介している。
⑤質疑応答	□ 質問に対する準備をしており、しっかり答えている。質問されるだけでなく、自分からも指名したりして、活発な質疑応答である。	□ 質問に対して、全てではないが、だいたい自分なりの答えを示している。活発ではないが、質問のやりとりがあった。	□ 質問されてもほとんど答えることができない。答えることを放棄している。または、質問されたくないようである。
⑥問題提起	□ 本文の内容を十分に理解した上で、もう一歩発展的に考えられる視点から問題提起をしている。	□ 本文の内容を理解して、一般的に考えられる問題提起をしている。	□ 本文の内容とあまり関係のない問題提起である。議論に発展しにくく、答えにくい問題提起である。
⑦意見	□ 賛成／反対という意見をはっきり表明し、理由もきちんと説明できる。	□ 賛成／反対という自分の意見を表明しているが、理由の説明が不十分。	□ 賛成／反対という自分の意見を表明していない。理由を説明していない。
⑧態度	□ 自信を持ち、堂々と発表している。内容を伝えたいという熱意を感じる。聞き手の顔を見て反応を見ながら話している。	□ 少し緊張しているが、準備してきたことを伝えたいという意欲を感じる。もう少し聞き手とのコミュニケーションがほしい。	□ 緊張しているのか、自信がないようである。聞き手の反応を見ることはほとんどなく一方的に話をしている。

◆合計点数：＿＿＿／40 点

◆メッセージ：＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

図 3　ルーブリック評価シート（秋学期）

6.2 ルーブリック（秋学期の評価シート）についての学生の回答

次に、ルーブリックについてどう思うかを尋ねたところ、79.4%の学生が「達成すべき評価基準（レベル）が明記されているのでわかりやすい」と答えた（表 1）。また半数以上が「自分の長所や短所を具体的に認識できるようになった」「これまであいまいだった評価内容がわかりやすくなった」と答えている。一方、春学期の評価シートの方が使いやすいと答えた学生も少数だが存在する。その理由として、「4 つから選ぶのは適当に選択できる」「評価項目が多かったので」「字数が秋学期より少なくて読みやすい」「簡略で自

分のコメントを変えやすい」等の声があった。「簡略で自分のコメントを変えやすい」とは、評価の観点が短い文で示されているため、自分が気づいた点を書き加えやすいとのことであろう。

表 1　秋学期のシートについてどう思うか。（複数選択）

項　　目	A	B	C	人数計（%）
1. 達成すべき評価基準（レベル）が明記されておりわかりやすい	11	8	8	27（79.4%）
2. 自分の長所や短所を具体的に認識できるようになった	9	7	7	23（67.6%）
3. これまであいまいだった評価内容がわかりやすくなった	9	5	5	19（55.9%）
4. 3 つから選ぶので、書く時間がかからない	6	2	5	13（38.2%）
5. 基準は 3 つでちょうどいい	6	5	2	13（38.2%）
6. 基準は 3 つでは少ない	4	3	3	10（29.4%）
7. 文が多いので、読む時間がかかる	0	2	0	2（ 5.9%）
8. 評価内容が多い	2	0	2	4（11.8%）
9. 評価内容が少ない	1	0	0	1（ 2.9%）

また、秋学期のシート（ルーブリック）は学生の読む負担を考えて尺度を 3 つにしたが、文が長いので読む時間がかかると答えたのはわずか 2 名であった。約 38.2%の学生は 3 つで適当だと答えている。一方、3 つでは少ないという学生も 29.4%であった。効率化の観点からは、約 38.2%の学生が「書く時間がかからない」と答えている。なお、教員側も春学期は学生 1 人当たり 15 分程度かかっていた作業がルーブリック使用で 5 分程度に短縮され、大幅に負担が軽減された。

7.　ルーブリックによる評価結果の分析

秋学期では、このルーブリックを、本人、クラスメイト、教員という三者の評価で用いた。以下ではその評価結果について分析する。

7.1　全体的傾向

まず、三者の平均数値を見ると、「意見」「レジュメ」「問題提起」「態度」は、5 点満点で 3.8 点以上だった。一方、「話し方」「質疑応答」は 3.5 点以下となっている。レジュメや問題提起、意見などは事前に準備することができるのに対し、話し方（声の大きさ、スピード、発音等）や質疑応答（質問に対する準備や応答、積極性等）は即興的な対応となるため評価が下がるのではないかと考えられる。

7.2　自己評価の伸び

秋学期開始時と発表後の自己評価の結果を比べると、全ての項目で点数が伸びており、発表後に成長感が見られた。項目別に見てみると、「レジュメ」の伸びが最も大きく（0.7

点)、「文法」「質疑応答」の伸びは 0.1 点にとどまった。「レジュメ」については、練習を何度か行い、他者のレジュメも毎時間目にする機会があることから、適切な書き方について徐々に意識づけられスキルの向上を感じているのではないかと思われる。一方、「文法」については、後にも触れるが、本人が成長したという実感を得にくい、または自己モニターしにくいため、伸びが感じられなかったとも推察される。同様に「質疑応答」については、前述のように、その場で出される質問について対処するのが難しいことが原因ではないかと考えられる。

7.3　教員の評価とのギャップ

次に、本人、クラスメイト、教員という三者の評価を比較した。図 4 は、教員の評価数値を 0 とした場合、本人およびクラスメイトの評価数値とはどの程度ギャップがあるかを表している。これによると、ほぼすべての項目で学生は教員よりも高く評価をしていることがわかる。本人は、「文法」「質疑応答」を除くすべての項目で、教員より高い評価をしている。また、クラスメイトは「レジュメ」「意見」を除き、本人よりも高く評価していることがわかる。

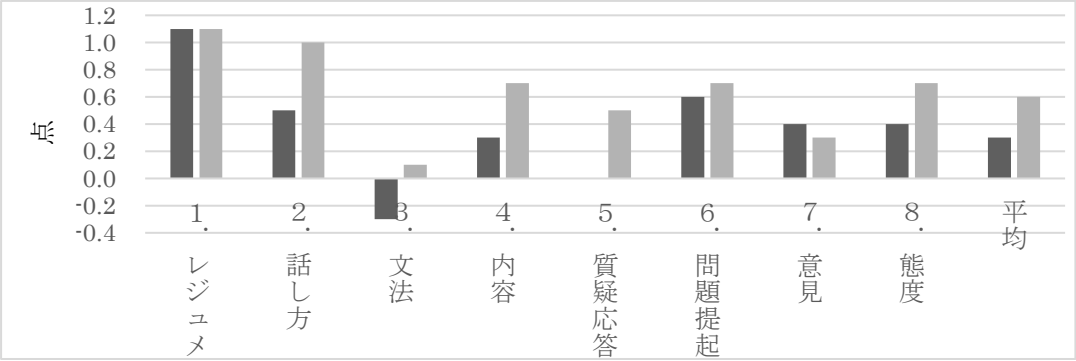


図 4　教員による評価とのギャップ（左：自己評価、右：クラスメイトの評価）

特に際立つのが「レジュメ」で、本人・クラスメイトともに教員より 1.0 以上高く評価している。この原因については、教員の要求するレベルと学生の実感レベルがミスマッチを起こしているということが考えられる。あるいは、教員の評価基準が厳しいか、評価基準が伝わっていなかった可能性もある。「話し方」についてのクラスメイト評価が教員より 1.0 以上高くなっていることも、同様の原因によると考えられる。

次に注目すべきは「文法」で、本人が教員より低く評価した唯一の項目である。これは本人が自己モニターができていない、あるいは自信がないことに起因している可能性がある。そして、「文法」はクラスメイトからの評価も低いことから、教員と学生とで何らかの評価観点のズレがあることが考えられる。

以上のように、教員と学生の評価結果を比較し、学生が過大評価もしくは過小評価している項目がある場合は、ルーブリックが学生のレベルに即しているものであるか、また、評価基準を学生がきちんと理解できているかについて確認を行う必要があるだろう。

7.4　教員評価との差が大きなケースの検討

教員と本人の点数の差が 4.0 と、大きなギャップが観察されたケースが 8 件（8 名）見られた。いずれも中国人の学生であった。その詳細を確認してみたい。

7.4.1　学生の自己評価が極端に高いケース

教員の評価が 1 点であるのに対して本人が 5 点をつけたのは「レジュメ」で 3 名、「話し方」「意見」「態度」で各 1 名ずつ見られた。

まず、各学生の「レジュメ」を見ると、1 名は箇条書きができておらず、単なる要約文になっていた。2 名は、日付や番号の書き方、順番をつけること、キーワードを書くこと等ができていなかった。これらは基本的なルールであり、発表前の練習でも何度か行っていたことであったため、教員からは低い評価となった。しかし、彼らはクラスメイトからも 3.9～4.7 点という高い評価を得ていた。ルールを守ることと実際の内容のわかりやすさについて、教員と学生とで何らかの印象的な差異があるようにも感じられた。

次に「話し方」の自己評価が 5 点の学生は、教員からは「話し方が早すぎる」「発音がやや不正確」「漢字の読み方」に誤りがあるとフィードバックされていた。本人は「発言のメモが用意したが、実際発表する際、メモを見る機会があまりない、メモを見ながら読むという選択肢があるが、皆と目を合わないし、たぶん発表に対する関心が喚醒させないという配慮もある。その結果ときどき言葉が中断したり、前後が混乱したり、漢字の読め方が忘れたりこともあった」と振り返っている。

また、「意見」の自己評価が 5 点の学生に対して、教員は「意見を表明していない」という部分をマークした。教員が「態度」を 1 点とした学生は「緊張しているのか自信がないようだ」「もう少し聞き手とのコミュニケーションがほしい」と評され、「ただレジュメを読むだけでなく、自分の言葉で再度言いかえてみましょう」「自信を持つことも大切」と伝えられた。しかし、クラスメイトの評価は 4.7 点であり、本人は「発表する時に自信を持っていて、内容を伝えようという勢いがある。ちゃんとみんなの顔を向いて話せるから」とレポートに書いた。学生たちは教員の着眼点とは異なる点を評価していた可能性がある。

7.4.2　学生の自己評価が極端に低いケース

教員の評価が 5 点であるのに対して本人が 1 点をつけたケースは「話し方」「態度」で各 1 名ずつ見られた。「話し方」について、本人は「私の弱点は発表の際に緊張していたことと、レジュメを読むことに夢中で視聴者の皆さんと共感しあえなかった点です」と振り返っているが、教員からは緊張を感じ取ることはなく、「大きな声ではっきりゆっくり話しており、聞きやすい」と評価された。クラスメイトの評価も 4.7 点と高かった。次に「態度」については、本人は「正直言うと自分の発表は本当に見苦しいです。あまり準備をしていないことや不得意なテーマを選んだり、自業自得ですね。早口、緊張、態度を直せば、少なくとも人前では出せる物になると思う」と振り返っているが、クラスメイトの評価は 4.1 点と高く、教員からは「自信を持ち、堂々と発表して」「熱意」があるとフィードバックされた。この 2 人に共通しているのは、一見堂々としているが、本人は準備不足と緊張感を感じながら発表を行っていたという点である。

以上、教員と本人とで評価結果に大きなギャップが生じるケースを分析した。ギャップの生じる項目はさまざまであるが、本人の振り返りレポートに加え、ルーブリックに教員が評価の根拠や感じた印象を記録できていたことで、このような分析が可能になった。

7.5　日本語レベルと評価点数の比較

最後に、学生の日本語レベルと評価結果とを比較・検討する。図 5 は、評価の平均点をクラスごとに表したものである。日本語レベルが高い順に A、B、C クラスとする。秋学期冒頭の自己評価では、日本語レベルが高いクラスほど平均点数も高かったが、発表後では A クラスの自己評価の伸びは 3 クラスの中で最も小さかった。また、クラスメイト評価は高い順に B、C、A となったが、B と C の差はわずかであった。教員評価は C、B、A の順である。また、全体の平均点（折れ線で示した）をみると、得点の高い順にクラスメイト、本人、教員という結果となった。

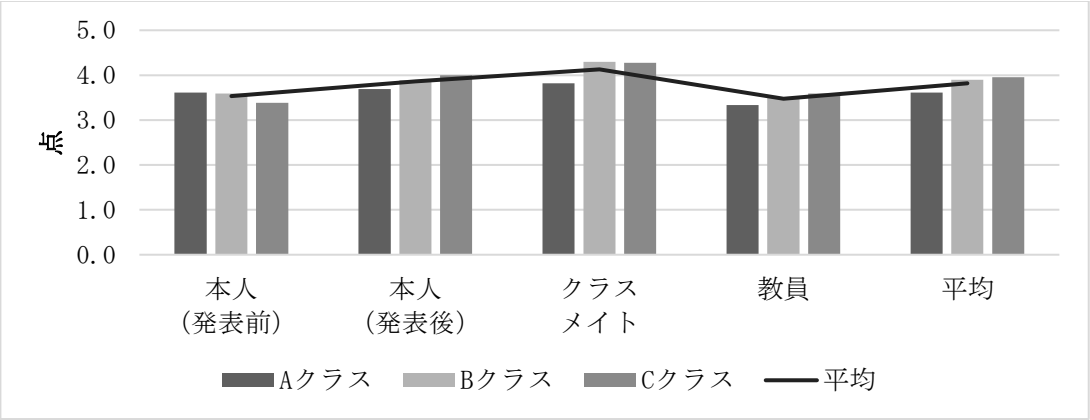


図 5　評価の平均点

以上のことから、日本語レベルが高いクラスほど本人の自己評価、および教員からの評価が低くなっていること、三者の中では教員が最も低い評価をしていることがわかった。日本語能力が高い学習者の自己評価が低いことは、彼らがメタ認知能力が高く、自律した学習者であることと関連があるかもしれない。また、レベルの高いクラスほど教員の評価が低くなったことについては今後の課題としたい。

8.　まとめと課題

以上、評価シートを用いたプレゼンテーションクラスの実践について報告した。ルーブリック評価シートは従来の評価シートに比べ、学生からより高い支持を得た。さらに、評価基準が明確になったため、評価が容易になり、学生・教員ともに効率的に評価ができるようになった。ルーブリック評価の結果を概観すると、秋学期冒頭と発表後では全項目で自己評価の点数が上がっている一方、評価結果はクラスメイト・本人・教員という順で低くなっていた。そして、日本語レベルの高いクラスの方が自己評価が低く、発表前と後の伸び率も小さくなった。一方、学生本人と、教員およびクラスメイトの評価結果にはギャップが見られ、特に「レジュメ」「話し方」「文法」について顕著な差が現れた。

ルーブリックを導入したことで様々なギャップが顕在化し、到達目標を教員と学生が同

じ感覚で共有する必要性が明らかになった。斎藤他（2017）や三浦他（2017）では教員の評価と自己評価のズレについてフィードバックする試みが報告されているが、これらは医学系および工学系の日本人学生が対象である。留学生を対象としたフィードバックについては今後の課題としたい。加えて、ルーブリックが対象学生に適したものであるかは常に検証し、学生の属性や日本語レベル、目的に合わせて作り直す必要もあろう。また、今回は８つの評価項目を１つのルーブリックに収めたが、これらを分割し段階的に使用することで、より細かい内容を意識させることもできると考えられる。西岡他（2015）のように、「長期的ルーブリック」を作成し、その細かな評価基準としてルーブリックとチェックリストを組み合わせるという方法も有効であろう。

スティーブンス＆レビ（2014）によれば、ルーブリックは大学や教育全般に固有の価値を反映したものであり、学生と教員がその共有された価値とは何であるかについてより理解するための一つの方法であるという。ルーブリックとは教員から学生に向けたメッセージであり、掲げた目標に向かい学生と教員がとともに努力するためのコミュニケーションツールであるとも言えるだろう。今後、より効果的なルーブリックについて検討していきたい。

（長谷川由香はせがわゆか・法政大学）

参考文献

安高紀子・品川なぎさ（2017）「教師の評価コメントに基づいたルーブリックの作成の取り組み」『アカデミック・ジャパニーズ・ジャーナル』10，28-36.

梶原彩子・内山喜代成（2018）「自ら作成した評価基準を用いて、学習者は自分たちをいかに評価したか:―口頭発表クラスにおけるルーブリック作成の試み―」『日本語教育方法研究会誌』 24(2)，128-129.

斎藤有吾・小野和宏・松下佳代（2017）「ルーブリックを活用した学生と教員の評価のズレに関する学生の振り返りの分析:PBL のパフォーマンス評価における学生の自己評価の変容に焦点を当てて」『大学教育学会誌』39(2)大学教育学会，48-57.

髙橋雅子・杉本美穂・飛田美穂・山方純子（2017）「プレゼンテーション活動におけるルーブリックの作成と活用―公平な評価と学習者への指標の明示化を目指して―」『早稲田日本語教育実践研究』5，189-190.

ダネル・スティーブンス，アントニア・レビ（井上敏憲・俣野秀典 訳）（2014）『大学教員のためのルーブリック評価入門』玉川大学出版会

西岡加名恵・石井英真・田中耕治（2015）『新しい教育評価入門―人を育てる評価のために』 有斐閣

三浦寛子・清水久恵・山下政司・横山徹・相川武司・渡邉翔太郎（2017）「ルーブリックを用いた自己評価、ピア評価、教員評価―初年次教育におけるプレゼンテーション評価に関する研究―」『工学教育研究講演会講演論文集』日本工学教育協会，156-157.